Angel beats神への反逆

Dark

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel beats 神への反逆

【Nコード】

N9144S

【作者名】

Dark

【あらすじ】

少年が目をさましたら見知らぬ学校だった
そこでゆりと出会い死んだ戦線に入る事にした
果たして彼らは世界を手に入れる事が出来るのか？
初めての作品なのでよろしくお願いします

入隊（前書き）

最後まで読んでくれたら嬉しいです

入隊

少年が目をさますとそこは知らない学校だった

ゆ「目が覚めた？」

少「誰？」

ゆ「まずきくことがそれかしら私はゆりみんなからはゆりっぺとよばれてるわ」

少「じゃあゆりっぺここは一体どこなんだ？」

ゆ「ここは死後の世界何もしなければけされるわよ」

少「誰に？」

ゆ「そりや多分神様にね」

さつきから何言ってるんだこいつひよつとしてアホか？

ゆ「というかあなた入隊してくれないかしら？」

少「何に？」

ゆ「死んでたまるか戦線に」

少「入ってどうするんだよ？」

ゆ「戦うのよ」

少「何と？」

ゆ「あれよ」

ゆりっぺの指をさす方向には銀髪の女の子がいた

ゆ「あれが死んでたまるか戦線の敵天使よ」

入隊（後書き）

さいごまで読んでくれてありがとうございます

iphoneで投稿してるので短くなると思います

天使（前書き）

いよいよ天使と対面です
指が疲れます

天使

少年「あれはどう見ても普通の女の子じゃないか」

ゆ「見た目は普通だけど油断しないほうがいいわ」

少「飽きた俺あっち行っていいか？」

ゆ「なんで意味わかんないあんたいつペン死んだら！！」

そこまでいうか普通さすがにちょっと傷つくな

ゆ「これは死ねないこの世界のジョークなんだけど笑えるかしら？」

少「笑えるか！！」

激しいツッコミをお見舞いした

ゆ「あなたいいツッコミしてるわね私の仲間みんなアホだからツッコミ役はよろしくね」

ツッコミ役に任命されてしまった

ゆ「そんなに行きたいなら行けば？どうなっても知らないから」

俺は何も言わずにそこから去った

近くに行ってみるとやっぱり普通の女の子だった

声をかけてみると

少「こんにちは」

天「・・・・・・・・・・こんにちは」

少「君狙われていたぞ君が天使だとか言っ

天「私は天使なんかじゃないわ」

少「じゃあなん「生徒会長」

と天使は言った

少「頭痛くなってきたわ病院にいつてくるわ」

天「病院なんてないわよ」

え・・・・・・・・

少「なんで？」

天「誰も病まないから」

少「どうして？」

天「みんな死んでるから」

少「じゃあ証明してくれよ俺は死んでるからもう死ねないって」

そうすると彼女はハンドソニックとつぶやいた

次の瞬間俺の心臓に刺してきた

俺の意識はそこでなくなった

天使（後書き）

読んでくれてありがとうございます
物語をどう進めて行くか迷います

出会い（前書き）

最近部活で疲労がたまっています

出会い

目を覚ますと保健室で眠っていた

確か俺は天使とかいう女の子に死ねない事を証明しろっていったら
心臓をグサリと刺されたんだっけな

俺は自分の体を見て驚いた

少「本当に治ってるあんなに激痛だったのに」

俺の体は何事もなっかたように傷痕がなかった

少「さてどうするかな？」

この世界の事はまだ右も左も分からないのでとりあえずゆりっぺの
いていた戦線を探してみた

探しているうちに音楽室からエレキギターの音が聞こえた入ってみ
ると女の子四人がいた

ひ「あんた新しくこの世界にきた新人か？」

少「まあそうゆうことになるな」

ひ「あたしはひさ子この世界でガールズデットモンスター略してガ
ルデモっていうバンドやってるんだ」

「担当はリードギターだからよろしく」

入「どうも入江です担当はドラムですよろしくね」

すげーテンションだな

関「そして私は関根です担当はベースです」

そして最後の女の子は

岩「岩沢だギターをしてるよろしく」

そして彼女は練習に戻った

入「ゴメンね岩沢さん音楽キチだから異性に興味ないんだ」

ひ「そういえばあんた名前は？」

仲「仲・・・田だ」

関「下の名前は？」

仲「それが思い出せないんだ」

ひ「記憶ないパターンかすぐに思い出すよ」

仲「そうだといいんだが」

ひ「ここは報われない人生を送った人が来るところだから思い出したら辛いだろうから覚悟しとけよ」

仲「ああわかった」

入「そろそろゆりっぺさんの所に案内するよ」

おれはゆりっぺの所へ向かっていた

遊「ゆりっぺさん新しくきた人が目を覚ましました」

ゆ「そう分かったわ。名前ぐらいは思い出したかしら？」

遊「仲田という名前らしいです」

ゆ「仲田!?!?!」

遊「どうかしましたゆりっぺさん？」

ゆ「いいえ多分人違いだわ」

遊「仲田という名前に思い出が？」

ゆ「ええちょっと生きてた頃にね」

もし本当にあいつだったらうれしいな

なんたってあいつは私を地獄の底から救ってくれた人だから

すげー

出会い（後書き）

読んでくれてありがとうございます
感想なども書いてくれるとうれしいです

再会（前書き）

GWが部活で消えてありません

再会

ガルデモのメンバーに案内されたのは校長室だった

仲「ここ校長室だぞ」

場所間違えてんじゃないか？

関「いやここであってるよ」

そして校長室に入ろうとすると

ガルデモ「あぶない！！！」

なんと横からハンマーが飛んできた

なんとか間一髪で逃れた俺は

仲「なんじゃこりゃ！！！！俺を殺す気か！！！！」

と思いつきりツツコミをいれてみた

入「この世界じゃ死なないってば死ぬ痛みなら味わうけど」

ひ「本部に入るには合言葉があるんだよ」

ひ「神も仏も天使もなし」

そうするとドアのロックが外れたような音がした

仲「それを早く言えよ」

入ってみるとそこにはゆりっぺが校長が座るようなイスに座っていた

ゆ「よくきたわねガルデモは帰っていいわありがとう」

岩「私達は練習に戻るとするよ」

ガルデモのメンバーが帰って俺とゆりっぺの2人きりになった

ゆ「ねえ貴方本当に仲田君なの？」

仲「ああそうだけどそれがどうした？」

ゆ「本当に覚えてないの？私よ仲村ゆりよ」

仲「仲．．村．．ゆり」

そのとき俺の脳裏にカチューシャをした女の子が横切った

そのとき俺は全てを思い出した

再会（後書き）

読んでくれてありがとうございます
マジで感想ください
アドバイスもお願いします

記憶（前書き）

いよいよ過半の話です

記憶

俺は普通に高校生活を送っていた

二年生になりクラスに転校生がやって来た

教室に入って来たのは女の子だった

ゆ「仲村ゆりです．．．．．よろしくお願いします」

転校生は美人であったがどこか寂しげな感じだった

席は偶然にも俺の隣の席だった

ゆ「よろしく．．．．．」

仲「ああ．．．．．」

そう言うと彼女は前を向いた

俺は彼女の事が気になって仕方がなかった

昼休みになり俺は昼飯を食べようとすると

ゆりが教室から出て行くのが見えた

気になってついて行くとそこは屋上だった

なんとそこで一人で昼飯を食っていた

気になって話しかけると

仲「なんで昼飯1人で食ってるの？」

ゆ「．．．1人でいたいから」

仲「なんで？」

ゆ「それは．．．」

仲「言いたくないなら言わなくてもいいさ」

彼女も色々な事情があるんだろう

仲「じゃあ俺といっしょに昼飯食おうぜ」

ゆ「え．．．．．なんで？」

仲「1人で食うより2人で食ったほうがおいしいからさ

ゆ「でも．．．．．」

仲「待ってるすぐに弁当とってくるから」

そういつて俺は急いで弁当を取りにいった

それから弁当を食っている間は一言も話さなかった

気がつけば放課後になり俺とゆりは一緒に帰っていた

そして別れ道の所で

ゆ「．．．私こっちだから」

とって俺の道とは反対方向の道を指差した

仲「そうか．．．じゃあまた明日」

そうして俺たちは別々の方向に進んでいった

ゆり別れてすぐ2人きりの夫妻に声をかけられた

？「君もしかしてゆり友達」

仲「ええそうですけどどちら様ですか？」

父「自己紹介がまだだったねわたしはゆりの父親です」

母「私はゆりの母親です」

仲「俺は仲田君です」

父「君に話しておきたい事があるんだけど時間は大丈夫かい？」

仲「ええだいたいじょうぶですけど」

俺はゆりの両親と一緒に喫茶店に入っていった

そこで俺は衝撃の事実を知る事になる

記憶（後書き）

今回はちょっと長めに書いてみました

真実（前書き）

誰かこの小説を見ているのでしょうか？
感想ください

真実

俺はゆりっぺの両親と近くの喫茶店に行く事にんあつた

そこで俺は真実を告げられる

母「私達はね今は三人家族だけど昔は六人家族だったのよ」

仲「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は黙って聞いていた

父「ゆりの下に妹が2人弟が1人いたんだ」

母「夏休みの時私達は仕事でいなくて家にいるのは子供達だけだったわ」

父「今思えばそれがいけなかったんだ」

母「私達がない間に強盗がやってきたのよ」

父「奴等は勿論金目のもの狙いだつた」

母「見つけれなかった彼等はテレビや家具を壊しついていた」

父「子供達を見つけた彼等は最悪アイデアを考えたんだ」

それは長女のゆりが金目のものを探して来ることだった

十分ごとに持つてこなければ弟や妹を殺すというアイデア

ゆりは必死に探したでも見つけれなかった

時間が十分になり部屋から銃声がした

それでもゆりは必死に探した

最後の十分まで決して諦めなかった

だが時間は過ぎて行き三十分がきて三回目の銃声が聞こえた

弟たちが殺されて最後にゆりはを殺そうとしたが

誰かが通報したのかパトカーの音がした

強盗は必死に逃げ出した

逃げたことを確認しリビングにいくとそこには変わり果てた弟達
がいた

ゆ「いやあああああああ！！！！！！！」

ゆりはその場で立ち尽くした

母「私達も急いで家に帰ったんだけどそのときにはもう……………」

仲「……………」

俺はなんて言葉を返したらいいかわからなかった

父「だから仲田君にお願いがあるんだ」

母「ゆりと一緒にいてあげて」

父「この通りだ!!」

両親は俺に頭を下げた

仲「頭をあげてくださいわかりました出来る限りやってみます」

そういつて俺は両親と別れ自分の家に帰った

自分の部屋に行き決心した

彼女を救ってやると

真実（後書き）

一向に話が進まないような気がします。．．．
感想マジでまっています

笑顔（前書き）

マジのマジで誰か感想ください

ゆ「……………」

ゆりは黙ったままだった

仲「俺が言える立場じゃないと思うけどいつまでそうしてるつもりだ？」

ゆ「あなたに何がわかるのよ！！三十分で全てを奪われた私の身にもなつてよ！！！」

それは今までに聞いた事がない怒声だった

仲「俺にはわかんねえよ！！でもないつまでもそうして弟達が喜ぶんでも思ってたのか！！！」

ゆ「!?!?!?」

仲「そんな事してる暇があるんならあいつら分まで生きてやれよ！！！」

ゆりの目には涙がこぼれていた

仲「これからはお前を救ってやる！！どんな事があっても必ず救ってやる！！！」

ゆ「本当に救ってくれる？」

涙目になって聞いてきた

仲「ああ勿論だ約束する」

ゆ「ありがとう人からこんな事いつてくれるのは仲田君が初めてよ」

仲「そのかわり、もし俺が困った状況になったらおれを救ってくれよな」

ゆ「ええ約束するわ！ありがとうおかげで元気が出たよ！」

仲「おう！！それにしても元気出過ぎだな？」

ゆ「普段の私はこんなもんよ！さあ昼休みも終わるし帰りましょう」

そして俺の手を引つ張り教室にもどっていった

その時の笑顔は今でも忘れられない

笑顔（後書き）

もう何もいう事はありません
ただ感想が欲しいです

告白（前書き）

しばらく更新していませんでした

告白

次の日になり俺は学校に行った

ゆ「おはよう仲田君！」

昨日とは別人のようなゆりがいた

仲「おう、おはよう相変わらず元気だな」

ゆ「朝は一日の始まりなんだからシャキッとしなさい」

一体その元気はどこから来るんだ俺にもわけてほしいね

ゆ「そうじゃあ・・・ふんっっ!!」

仲「痛ったあああああ!!!」

ゆりがいきなり俺の背中を叩いてきた

仲「おいこらっ!!仲村!いきなり何しやがる!!」

ゆ「元気を分けてあげたのよ感謝しなさい」

仲「まったく本当に勘弁してほしいよ仲村」

ゆ「ゆりって呼んで」

仲「へ?」

ゆ「これは命令よ!」

仲「はいはいわかったよゆり」

ゆ「そうよ．．．わかればいいのよ」

ゆりは顔を真っ赤にしていた

そして授業が始まりあつという間に昼休みだった

ゆ「だっくん一緒に食べましょう」

仲「だっくん!?!?」

ゆ「ええ仲田だからだっくんよ」

仲「ネーミングセンスなさすぎだろ」

ゆ「いいじゃない可愛くてだっくん」

俺のトラウマがまた1つ増えた

俺たちはいつもどおり昼飯を食べていた

ゆ「外で食べるのは美味しいわね」

仲「どこで食っても同じだろ」

ゆ「そんなことないわよ、わからない人ねアホだわ」

ついに俺はアホ扱いされた

そんなこと言わなければ可愛いのに

ゆ「何かいった？」

ゆりの笑顔は妙に不気味だった

その笑顔から殺意を感じた

こんな時間はが一生続けばいいのにと思った

あの事件があるまでは

告白（後書き）

過去編はもうちょっと続くとおもいます
感想をお願いします

事件（前書き）

今テスト期間中でなかなか書けません

事件

次の日いつものように学校に行ったら教室は賑やかではなかった
なんとゆりが欠席していたのだ

あの元気だけが取り柄のあいつが休むなんて

今日は不吉な予感がする

放課後になり俺は先生に呼び出された

先「これ仲村さんのプリント悪いけど持って行ってくれない」

仲「なんで俺が？」

先「仲田君、仲村さんの彼女なんでしょ？」

仲「ち・違います！あいつとは悪友です！」

先「またまたく照れちゃって」

仲「からかわないでください！」

俺は急いで職員室を出た

校門を出たとき思った

1人で帰るの久しぶりだな

俺の中であいつは俺にとってかけがえのない存在だった

あいつの家に着いてインターホンを鳴らした

ピンポン

返事がない

このとき俺は嫌な予感がした

家の中から血生臭い匂いがした

仲「ゆり！！！！」

俺は急いで家の中に入った途端信じられない光景を目の当たりにした

リビング全体真っ赤に染まっており死体が3つあった

それは確認するまでもなく仲村家の死体だった

仲「これは一体何のドッキリだ？ドッキリ大成功の看板はまだか？」

ゆりに聞いてみたが返事がない

仲「おい！！！！ゆり！！！！目を開けてくれよ！！！！！！」

目からは自然と涙が出ていた

仲「お前をまだ救っていないじゃないか！！！！」

仲「お前に言いたいことたくさんあるのに・・・」

何回叫んでも無駄だった

だって仲村ゆりは死んだのだから

事件（後書き）

何か残酷だなんて自分でも思います
感想をお願いします（^O^）／

絶望（前書き）

気がついたら10話目です

絶望

俺はすぐに警察に通報した

警察が調べた結果死因は果物ナイフで刺したそうだ

急いで救急車で運ばれたが三人とも死亡が確認された

俺は絶望的な気持ちになった

まだあいつを完全に救ったわけでもない

まだ話しておきたい事たくさんあるのに

俺をおいていくなよゆり……………

……………

ゆ「思い出したようね」

仲「ああ……………」

ゆ「だっくんはどっしする？」

仲「どっしするって？」

ゆ「これからも戦線にいるの？」

仲「いるよこのままじゃ死にきれないし」

ゆ「そう．．．．．これからよろしくね」

仲「ああよろしく」

俺とゆりは握手を交わした

ゆ「今日は遅いし詳しいことは明日話すわだから今日は帰りなさい」

仲「帰るってどこに？」

ゆ「言っただけじゃなかったこの学校は全寮制よ」

仲「そうなんだ、で俺の部屋はどこに？」

ゆ「そんなのわからないわよ自分で探せば？」

酷すぎるさすがゆりっぺマジ悪．．．

ゆ「何か言っただかしら？」

ゆりは俺に銃口を向けてきた

仲「いいえ！！なんでもありません！」

俺は急いで本部を出た

仲「やっぱり死んでもあいつの凶暴さはかわらん」

よく生前あいつについて生きてたなと思った

仲「しかしデカイ学校だな俺の部屋全然わからんし」

寮の名前を見ると女子の名前ばかりだった

仲「もしかしてここ女子寮？」

なんてこつた俺は女子寮にいるのか!!!

やばいこんなとこ誰かに見られたら!!!

「男子がこんな所でなにしているんですか？」

ふりかえると金髪のツインテールの女の子がいた

仲「いやあちょっと男子寮の行き方がわからなくて」

「そうですね残念ですが今男子寮は消灯中で中には入れません」

仲「ええ!!!じゃあ俺どうしたら……」

「私の部屋に来ますか？」

仲「え？」

「ルームメイトがいないので1つベッドが空いています」

仲「なにiiiiiiii!?!?!?!」

良いのか年頃の男女がいつしょに寝ても

？「それともゆりっぺさんの部屋がいいですか？」

仲「それは遠慮しとく」

即座に答えた

あいつといっしょに寝たらいのちがいくつあっても足りない

仲「じゃ．．．じゃあお言葉に甘えて」

遊「私は遊佐です」

仲「俺は．．．」

遊「だっくんですね？」

仲「知ってたのかよ」

遊「ゆりっぺさんから聞きました」

あいつめ余計なことをまあ女の子だからいつか

遊「部屋に案内しますこちらです」

部屋に入ると特に何も無い普通の部屋だった

でも流石は女の子良い香りがする

遊「ベッドはこちらです」

案外遊佐とのベッドとベッドの間は近かった

理性が保つだろうか

遊「襲わないでくださいね」

仲「襲うか!!!人の心を読むな!!!」

遊「だっくんはいじつたら面白いですね」

仲「俺で遊ぶな」

俺はベッドに入った

勿論俺のベッドの方だ

遊「もう一度言いますが・・・」

仲「襲わねえよ」

すぐに寝た

このままじいじられたら俺いじられキャラになるからな

絶望（後書き）

今回は長く書きました
感想よろしくお願いします

女心はわからん(前書き)

最近暑くなってきました

女心はわからん

俺の部屋がわからないため遊佐の部屋に泊めてもらった俺だが
もちろん眠れるわけがない

遊佐はあの後ゆりとはどういう関係なのか？と質問攻めだった
そんなことしていたら朝を迎えてしまう

俺はなんとか振り切り寝ることにした

朝になり起きて見ると遊佐はまだ寝ていた

遊佐の寝顔を見て俺は一瞬可愛いと思った

遊「ゆりっぺさんがいながら私にまで二股ですか？」

仲「起きてたのかよしかも二股じゃねえよ！付き合ってもない！！」

遊「そうですか……………」

仲「とりあえず俺は本部に行くよゆりにまだ詳しい事聞いてないし」

俺が校長室に行こうとした瞬間

ゆ「遊佐さんちょっと聞きたい事が……………」

運悪くゆりが入ってきた

ゆ「ちょっと!!何でだつくんといっしょにいるのよ!!しかもこんな朝早くから!!」

仲「いやあく俺もちよつと遊佐に聞きたい事が・・・」

遊「だつくんとは昨日の夜に男子寮に帰れなかったので私の部屋に泊めました」

ゆ「何ですって!!!!」

仲「心配するなゆり!!!!別にいかがわしい事はしてない!!!!」

ゆ「本当なの遊佐さん？」

遊「それは・・・いえません」

遊佐が赤らめた顔をした

いつもは無表情なのにあんな表情は初めて見た

仲「おい!!遊佐!誤解を招くようなことはやめろ!」

ゆ「そう、よくわかったわあんたはそこまで女たらしだったとはね」

ゆりは俺に銃口を向けてきた

仲「やめろ!誤解だ!」

遊「．．．私もうお嫁に行けません．．．」

バアン

俺の意識はここでもなくなつた

目覚めた時俺は保健室にいた

遊「目が覚めましたか？」

入「ここまで運ぶのに苦労したよ」

関「こりゃあ食堂で何か奢ってもらわないとね」

そこにいたのはガルデモメンバーと遊佐だった

仲「お前らが俺を運んでくれたのか？」

ひ「まあ運びやすかつたけどね」

仲「何で？」

岩「あんたが死んだ後ゆりがいろいろやってたからねナイフであんたを刺したりほかには．．．」

仲「それ以上いわなくていい」

どうやら俺は死んでいる時にゆりに散々やられたらしい

仲「しかしなんであいつ怒ってたんだ？ただ泊めてもらっただけだろ

う

ひ「鈍感だな」

入「鈍感ですね」

関「鈍感だね」

岩「飽きた」

遊「ゆりっぺさんかわいそうです．．」

？「あさはかなり」

振り返るとそこにはマフラーをしている女の子がいた

遊「紹介しますこちらはあさはかなりが口癖の椎名さんです」

椎「ゆりからの報告だ仲田は至急本部に集合するようにと」

仲「ああわかったすぐ行くよ」

関「頑張ってね」

ひ「生きて帰ってこいよ」

遊「気をつけてください」

俺は戦場にもいくのか？

ひ「ある意味戦場だな」

胃が痛くなってきた

俺は忙しでゆりの元へ行った

女心はわからん(後書き)

何か女性キャラしか出ていないような気がします
感想よろしくお願いします

初オペレーション(前書き)

しばらく更新してなくてすみません
最近部活がいそがしくて

初オペレーション

俺は急いで本部に向かった

あいつは時間につるさくて少しでも遅れたら何か奢らされていた

ゆ「遅い!!いつまで待たせるのよ!!」

仲「悪い、今度何か奢ってやるから」

ゆ「まあいいわ、それよりこれに着替えて」

渡されたのはゆり達が着ている制服だった

俺を急いで着替えた

仲「で呼んだのはこのためだけか？」

ゆ「ほかにもあるわ、だっくんにはこれからオペレーションをやってもらうから」

仲「俺だけか？」

ゆ「ほかの仲間がそろそろくるはずよ」

日「よう！お前が新人の仲田か？俺は日向よろしくな」

大「始めまして僕は大山よろしくね」

藤「俺は藤巻だボウズよろしくな」

高「始めまして高松ですよろしく」

松「俺は松下だよろしくな」

仲「ああよろしく」

ゆ「あともう2人いるけどまあいいわそのうち来るから」

ゆ「今日のオペレーションはオペレーショントルネード!」

全「!!!!!!」

松「こいつはデカイのが来たな」

仲「トルネードってなんだ?」

ゆ「生徒から食券を巻き上げる!」

仲「カツアゲじゃねえか!! どんだけ金がないんだよ!」

?「貴様!! それはゆりつぺに対する侮・・・グワあ!!」

校長室に入って来た少年は放物線を描くように飛んでった

ゆ「彼が野田君よ。それにしても相変わらずアホね」

藤「自分の仕掛けた罠に引っかかってやがる」

ゆ「話の続きをするわよ、まずだっくんには天使の足止めをしてもらおう」

仲「どうやって足止めするんだ？」

ゆ「これで天使の足止めをして」

渡されたのは拳銃だった

仲「こんなもんどつから持ってきた？」

ゆ「そのうち話すわ作戦決行は19:00それまで待機してて解散」

俺は校長室を出た

作戦まで時間があるそれまで何をするか？」

ゆ「ちよつとまちなさい」

振り向くとそこにはゆりっぺがいた

仲「何か用か？」

ゆ「呼んだのに遅かったから何か奢ってよ」

仲「はいはい、じゃあ食堂に行くか」

ゆ「ええ、行きましよう!!」

仲「ちなみに聞くけど何を食べるんだ？」

ゆ「そうね．．．．疲れたから甘い物が食べたいわ」

仲「太るぞ」

ゆ「ふんっ！！」

ゆりっぺが俺にマジ蹴りをくらった

仲「痛えな！何しやがる！」

ゆ「あんたつてば死んでもデリカシーがないわね」

仲「お前こそ死んでも凶暴さは変わらん．．」

ゆ「ふんっ！」

またくらった

ゆ「次何かいったら脳天に撃つわよ」

仲「マジですみませんでした」

ゆ「何だかあの頃みたいで懐かしいわ」

仲「そうだな」

ゆ「さあさっさと行きましょー！！」

食堂に行って俺の全財産がなくなったのは言うまでもない

初オペレーション(後書き)

おそくなってすみません

次回はもうちょっと早めに書きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9144s/>

Angel beats神への反逆

2011年10月9日01時32分発行